



News Letter



当センターは、紀伊半島を中心に、食と農林水産業の分野に関わる研究活動を通じて、学術研究の発展と地域社会との連携や地域貢献機能の強化に資することを目的に研究活動を行い、加えて研究成果の地域への提供や学内外における教育活動を行っています。今年度も、地域の方々と連携しながら、さまざまな研究教育活動を行うことができました。今年度の活動内容につきまして、皆さまにご報告いたします。

引き続き、当センターへのご理解やご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地域課題の解決を目指した研究プロジェクトの推進

本センターの研究プロジェクトの一部をご紹介します

地域資源の循環や脱炭素による農業や農村の活性化に向けた研究

東京大学未来ビジョン研究センターとの共同研究であり、和歌山サテライトとして活動しています。本年度は、JSTや本事業参加団体が一堂に会する研究成果報告会（サイトビジット）を田辺市で開催し、秋津野ガルテンの視察とともに、研究全体の進捗報告と質疑応答を行いました。また、紀北農芸高校での未来ワークショップ【テーマ：「持続可能なわかやま農業の実現～地域資源を活用した循環型の農業を考える～」】も、昨年度と同様に、座学・フィールドワーク（早和果樹園と秋津野ガルテン）・ワークショップを分けて実施しました。今後は、県内農業系高校や商業系高校を中心に実施予定です。



秋津野ガルテンでの講義風景

「きみの地域づくり学校2024」において「地域×教育」シンポジウム開催

関係人口創出プロジェクトでは、「きみの地域づくり学校2024」を紀美野町と共催しました。本年度も、地域活動を行う地元住民をはじめ、地域おこし協力隊、町・県の職員、大学(院)生、高校生が参加し、大学の研究者などの専門家や起業した事業者から15講義を受講するとともに、希望者は、メンターの事業現場で実践を通じて学びました。また、うち1コマをシンポジウム形式で公開し、「今、子育て世代が地域に求める教育」をテーマに、幼児から高校の幅広い実践者・行政職員をパネリストに招き、若いお母さんなど大勢の方に参加いただいて、地域の可能性について考えました。2025年度も新しいテーマやフィールドワークが加わり、開催されます。

<https://www.town.kimino.wakayama.jp/sagasu/machi/chiikidukurischool/index.html>



「地域×教育」シンポジウム

2024年度もソルガム、2025年度もソルガム

食農総合研究教育センターでは、ソルガムの栽培と消費拡大を目的とした普及活動を継続して行っています。2024年度はソルガムに興味を持った学部生がメンバーに加わり、ソルガムを中心とした教育・研究活動の幅が広がりました。学生たちはソルガムの栽培マニュアルの作成を目指した活動を進めたり、商店街で開催された催しで市民向けのポスター発表などを行ったりして、ソルガム普及の種を蒔いてくれました。研究ではソルガムの機能性成分に着目した取り組みを模索しています。今後も地道な活動が続くことが予想されますが、2025年度もソルガムの普及を目指した活動を進めていきます。



発表した学生とポスター

バイオ炭による炭素貯留への 貢献を視野に入れた基礎研究

当センターでは、昨年度より和歌山県内の県公設試験研究機関(和歌山県果樹試験場うめ研究所、和歌山県工業技術センター)と連携し、果樹剪定枝を原料としたバイオ炭の収炭率や性状に関する研究を進めています。2024年3月には、2023年11月に採取し自然乾燥させた梅の剪定枝を用いて、開放型簡易炭化装置によるバイオ炭製造の実証試験を行いました。今回の実証試験では、梅剪定枝の部位ごとに収炭率が異なる結果が得られました。これらの結果の一部をとりまとめ、日本炭化学会研究発表会で報告しました。今後もこのような実証試験を継続し、農業分野における温室効果ガス削減を目指し、農地への炭素貯留に貢献する研究を進めていきます。



梅剪定枝からバイオ炭を製造する実証試験の状況

地域おこし協力隊の活動及び ネットワーク活動への支援

関係人口・定住人口として大いに期待される地域おこし協力隊ですが、活動の満足度を高め、任務先とのミスマッチをいかに防ぐかが課題として挙げられています。当センターでは、和歌山県と連携し、現役隊員を軸とする卒隊員・行政職員・地域との結びつきを強化すべくネットワーク化を推進・支援してきました。2023年に卒隊員有志により結成された「(一社)わかやま地域おこし協力隊ネットワーク(通称 TOK.net)」の活動も2年が過ぎ、隊員への相談業務、隊員や担当職員双方への研修会や交流会、隊員受入拡大事業等を請け負いながら、県内の隊員数は2年前より約30名増の73名になっています。当センターは、今後も和歌山県の地域おこし協力隊制度拡充への支援を継続していきます。



わかやま地域おこし協力隊ネットワークによる担当職員研修

都市農業振興に向けた JAわかやまとの共同研究

都市農業振興に向けて、現地視察と講演会を実施しました。JAわかやま関係者とJA広島市を視察し、現状の取り組みとともに、担い手確保(新規就農者)対策等について意見交換を行いました。具体的には、新規就農者へのヒアリング、広島菜漬の加工場や直売所の視察などを行いました。また、講演会として、農業体験農園の利用者確保に向けた「家庭菜園で野菜栽培を楽しもう」と題して、追手門学院大学の藤田武弘氏の基調講演とともに、市内の農業体験農園園主らが登壇したパネルディスカッションを実施しました。



JA広島市管内の新規就農者ヒアリング

わかやま マーケティングリサーチプロジェクト — 阪神百貨店食祭テラスの取り組み —

阪神百貨店の食祭テラス(1階売場)で、学生が選定した県内商品や地元企業と開発した商品の販売、和歌山のPRなどを行っています。県内の生産者(製造業者)の訪問、実際の顧客に対するの販売、顧客アンケートや売上データ分析なども行っています。



阪神百貨店(食祭テラス)の売場

研究成果を活用した **学び** (教育活動・講義)

JAわかやま寄附講義「食と農のこれからを考える」

本年度は、学生361人、JA役職員10人、行政関係者・聴講生ら19人が受講しました。毎年恒例のJAわかやま前年度受講者とともに、フリーランス農家や農業法人代表などが登壇し、熱弁をふるいました。最終回では、若手農業者が受講生からの質問に答える形式で、普段触れない農家のリアルに迫りました。



第11回「食と暮らしの研究会 — グローバルな視点から —」

(一財)地球・人間環境フォーラム研究推進ユニットの宮崎英寿研究官から「ザンビア南部州でのソルガム普及は単純ではなかった」というタイトル、石山俊客員教授から「アフリカ・中東乾燥地の農村研究を和歌山で活かすところみ」というタイトルでご講演いただきました。学生からの質問を促すことで質疑も活発に行われました。